

〈 礼拝説教 〉 2010年5月2日

財産を横取りしようとする雇い人

イザヤ書 五章 一～七節

マタイによる福音書 二十一章 三十三～四十五節

武田真治

1、最初の設定が肝心

今日の聖書の箇所は『ぶどう園と農夫の譬え』と呼ばれる「譬え話」です。

イエス様が為された「譬え話」を読む場合に、最初に必ず目を留めなければならない点があります。それはそのお話の場面設定です。イエス様がどのようなお話の設定を設けられて話し始めておられるかという点が大事なのです。この点を抜かして読んでしまいますと勝手な読み方やいびつな解釈に流されてしまうのです。

今日の「譬え話」の場面設定はこのように始まります。即ち、『ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に絞り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た』です。

当時、ぶどう園を持つということは人が起してみたい事業の中でもあこがれの業でした。そこには勿論、おいしいぶどうやワインを自由に手に出来る喜びということもありますし、当時は最もたくさんの現金収入を得られる手段でもあったからです。しかしそれだけに、このぶどう園を所有するためには大変な苦勞も伴うことでもありました。何より、たくさんの土地が必要になります。それだけでなくぶどう園を維持していくための尽力も必要となるのです。

この譬え話の主人も、ぶどう園を作っただけでなく、野の獣や盗人が入って来ないように垣を巡らし、収穫されたぶどうを集めてワインにするための搾る穴を掘り、桶を作り、夜に強奪者が襲って来ないか、近くで火事が発生しないかを見張るやぐらも立てたのでした。

それこそ、お金をかけ、手を入れ、丹精込めてぶどう園を経営しようとしているのです。それだけの準備をした上でそのぶどう園を「農夫たち」に任せたのでした。

今日、もう一つ読んで頂いたイザヤ書にも『わたしは歌おう、わたしの愛する者の

ために、そのぶどう畑の愛の歌を』とありますように、ぶどう園そのものが愛する対象となる程であったのです。

2、この世を愛される神

このように設定を見た上で、この譬え話を考えてみましょう。

ここで、ぶどう園の主人が神様のことを表していることは明白ですが、問題は「ぶどう園」とは何かということです。これ程までにその主人である神様が、持つことを欲せられ、手を入れ、愛されておられるぶどう園ということですから、それは「この世界、この世」以外にはないように思います。まさに、神様が手ずから創造され、愛され、手を入れておられる場所こそ「この世」です。神様は何より、その深い愛をもってこの世を、そしてそこに住む私たちを愛し、そして手を入れて下さっているのです。その最高の神様の愛による「手入れ」こそが、イエス様をこの地に遣わして下さった出来事ではないでしょうか？神様の究極のこの世への愛の表現がイエス様の来臨であり、その十字架と復活です。

それが、まさにヨハネ福音書がその三章十六節に書かれてある通りです。

即ち『神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。』です。イエス様がこの世に着て下さったことにこそ、神様のこの世への愛が最もよく表されているのです。

そして、今日の譬え話のこの後の内容もまさにこのヨハネ福音書のみ言葉と見事に一致していると言えます。

即ち、『さて、収穫の時が近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。そこで最後に、「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちは、その息子を見て話し合った。「これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。」そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。さて、ぶどう園の主人が帰って

来たら、この農夫たちをどうするだろうか。』です。

3、裁きではなく、招きとして

神様がこの世と私たちを愛して下さって、その愛の故に最後の手段として「息子＝み子」であるイエス様を派遣して下さったのに、人々はその息子を殺してしまうと仰っておられるのです。これは、まさにこれから起ころうとしているイエス様の十字架を表しています。いわば、イエス様ご自身による十字架予告・受難予言ではないでしょうか？

このイエス様の言葉を耳にした祭司長やファリサイ派の人々が『イエスが自分たちのことを言っておられると』気がついた（四五節）のもよく分ります。まさに彼らがイエス様を十字架につけて殺すのです。

ただ、ここで間違っははいけないことがあります。この譬え話をイエス様は確かにこれから起こるご自身の十字架の死を予想されて語っておられますが、それは、祭司長やファリサイ派の人々に対する「罪の告発」や「裁きの宣告」のためではないということです。このまま行けばこのようになってしまうということを敢えて前もって語られることは、相手への警告であって、断罪ではありません。その人達を裁きたいのであれば、むしろ語らず、彼らが悪いことをしでかした後に「こんなことをした」と告発すればよいのですから。

従って、この譬え話は彼らへの悔い改めを促す「招き」であったと言えるのです。その思いが最もよく出ているのが、譬え話の中にある『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』という主人の言葉です。ここで「敬う」と訳されている言葉は、頭を下げる・反省するという意味もある言葉です。愛する「息子」まで遣わして、礼を尽くしてこの世や私たちを大事にして下さるお姿に接して「心を改めてほしい」という切なる思いがここに込められているのです。

4、すべては神様のもの

ところが、彼らは一切このイエス様の言葉に耳を貸すことはなかったのです。

どうしてそうなるのでしょうか？

その答えもこの譬え話にちゃんと語られています。即ち『さあ、彼の相続財産を我々

のものにしよう』という雇い人たちの言葉です。つまり、このぶどう園を自分たちのものにしたい思いです。その為に、主人が送った『僕たち（旧約の預言者たちや洗礼者ヨハネ等）』を殺し、『息子（イエス様）』をも殺すのです。その心の奥底には「自分の物にしたい」という欲望があるからだ。この欲望に駆られると平気で人を殺してしまうようになると。だから考え直してほしいとイエス様は譬え話を用いて切実に伝えておられるのです。

ぶどう園を欲しがるといことは、そのぶどう園が気に入っていた証拠でもあります。彼らなりに愛していたのでしょう。

しかし「自分の物にしたい」という欲望は、得てして、その愛する対象のことや本来の在り方を無視して、自分の都合の良いようにさせるということになるのではないのでしょうか？「愛している」と言いながら、実は自分の思い通りに相手をさせたいだけなのです。それは本当の意味での「愛する」ことではありません。歪んでいます。

私たちも愛する者がいます。愛する物があります。でも、それらは本来、神様が私たちの為に「手入れをして・丹精込めて」与えて下さったものではないのでしょうか？家族や仕事、この体や命さへも。それをあたかも自分の思い通りにしたい、そうでないと許せないと考えること自体、間違っているのです。そのまま突き進むと最後にはその相手も、そして自分をも滅ぼしてしまうのです。

（説教より抜粋）